

13



旭岳黒岳縦走

8月初旬に、東京から遊びに来てくれた登山初体験となる娘と一緒に旭岳から黒岳まで縦走しました。ルートは、旭岳ロープウェイ姿見駅→旭岳山頂→間宮岳→中岳→お鉢平展望台→黒岳石室→黒岳山頂→リフト乗り場までの約12キロの道のりで所要時間7時間ほど。旭川駅との往復はバスを利用しての日帰り縦走に成功しました。

き交う際に挨拶のエール交換をして士気を高めました。何度も休憩して水分を補給する度に、眼下の広大な眺望やどんと遠ざかって小さくなっていく姿見駅や登山者などを眺めて高度を実感しながら、計画通り2時間ほどで登頂を果たしました。最高峰の旭岳を登頂できた達成感の中での山頂からの眺めは絶景で、晴れ渡る360度の大パノラマから姿や色形が異なる見事な周囲の山々や大雪渓を目の当たりにして、娘はすごい、すごいと驚嘆の連発でテンション爆上がりでした。

旭岳登頂後のお鉢平に向かつて旭岳を下山する道が予想外の難所でした。いわゆる「ザレ場」という小石や砂、風化した岩などが蓄積して滑りやすい登山道となっていて、小股で慎重に歩を進めても、靴底でとらえた地面が崩れてスリッパしたり尻もちをついたり連続でした。さらに、途中から雪渓上を進む行程もあり、ザレ場とも異なる滑り易い雪道を慎重に時間をかけて下り、ようやく裏旭キャンプ場付近まで辿り着きました。この下りは、登りで重宝した登山用ストックをあまり有効に使いこなせず、大変な苦労の連続で、娘も私も今回の登山の中で最難関の場面でした。

旭岳の登り下りの難関を何とかクリアした後はお鉢平の直径2キロの巨大なカルデラの尾根に沿って間宮岳、中岳、お鉢平展望台と順調に回りまわりました。一時的に風が強まる場面はありましたが、晴天が続いていたため、登山道に沿ってお鉢平の巨大な地形とお鉢の中の大雪山を楽しむながらの道中となりました。大雪渓の先端から流れ出る雪解け水の綺麗なブルーの川も印象的でした。旭岳から黒岳まで道のりは、至る所で登山道の地質・石質や植物の植生が次々に入れかわり、厳しい自然環境のなかでつましく可憐に咲く多様な高山植物も楽しみながら、黒岳石室まで至りました。

黒岳石室では、トイレ休憩と冷たい飲み物を補給したうえ、黒岳周辺の草花情報などを得ることができました。こうした休憩所があることは心身ともに休まって大変ありがたかったです。黒岳は巨大な岩石がいくつも積み重なったような山でした。最後の急こう配を登り切り、黒岳山頂でこれまで巡ってきた登山道の一本道を振り返ってみると、達成感もまた、ひとしおでした。黒岳山頂で驚いたのは、小さなお子さん2人をおんぶと抱っこしていたお母さんがいたことです。旦那さんも含めた4人で登山していたので、交代でお子さん2人を担いできたのだとは思いますが、黒岳山頂までの急こう配のギザギザ坂をよく登ったと感心させられました。

植生が様々な高山植物の多様性にも驚きました。旭岳姿見駅周辺では7月中旬頃に見ごろだったチングルマやエゾノツガザクラ、コエゾツガザクラなどは盛りがすぎ花は散っていた一方、黒岳石室から黒岳の麓にかけてはこれらの花が満開に咲き誇っていました。黒岳山頂からリフトまでの下り道も緑が豊富で、アザミやタイセツトリカブトなど、たくさん色とりどりの綺麗な草花を見ることができました。一期一会の美しい景色に出会うのも大きな魅力です。

旭岳と黒岳のそれぞれの登り下りの登山道には登山者が比較的多くいましたが、旭岳から黒岳の縦走ルートでは、登山者はまばらで、しかも日本人登山者が少なく、8割方が海外、そのほとんどがヨーロッパ系の人々でした。1人で縦走する人や小さな子どもを含む家族5人連れで縦走するパーティなど、個々人のスタイルで縦走を楽しんでいるようでした。登山者はまばらでしたが、道しるべとなるピンクのリボンや岩場黄色のペンキ矢印、崖の近くや登山道を外れそうな危険な場所での緑のロープなど、初心者にも分かりやすい道案内があつて安心して登山を楽しめました。こんなに美しく雄大な景色を楽しめる場所でしたので、多くの人々にこの感動的な大自然を楽しんでもらいたいと思いました。



【佐藤弘康さとうひろやす】1970年、宮城県出身。東北大学法学部卒。システム情報局企画役、決済機構局企画役、業務局企画役、発券局戸田発券課長を経た、2025年、旭川事務所長に就任。

帰宅後、翌々日からしばらく全身筋肉痛のおまけつきとなりましたが大変充実した親子登山を満喫できた夏休みとなりました。（毎月第四週に掲載します）